

朝鮮・枕肱懸辯の念佛觀について

韓 普 光 (泰植)

1. 枕肱懸辯の生涯と禪修行

1. 1. 生涯

枕肱懸辯 (1616-1684) は西山大師の高足である逍遙太能 (1562-1649) の嫡子として、逍遙派の守長である。彼の行蹟と生涯は、『枕肱集』2巻に伝えられる。『枕肱集』上巻には五言絶句 28 首と七言絶句 45 首、五言律詩 8 首、七言律詩 32 首などの 113 首の漢詩が収録されており、下巻には書簡文と募縁文、勸善文、勸誘文などの散文 25 篇と偈頌及び古詩形式の韻文 2 篇などの 27 篇、そして「枕肱大師行狀」が収録されている。また、附録として「枕肱歌」で歸山曲、太平曲、青鶴洞歌、往生歌の 4 篇の歌辭を載せている¹⁾。

枕肱は全羅道羅州で生まれた。字は而訥、法號は懸辯、號は枕肱である。俗姓は尹氏である。父は尹興、母は崔氏である。彼は光海君 8 年 (1616) に生まれ、肅宗 10 年 (1684) に入寂した。12 歳 (1627) に天風山の塔庵で葆光虔祐法師のもとで出家し、多數の書籍と佛經を學んだ²⁾。13 歳には葆光を離れて、逍遙太能禪師を參謁して法脈を繼承した。

得其禪宗者 曰枕肱懸辯 傳其教宗者 曰海運敬悅³⁾

18 歳の時に事故にあつて死境を経験した後、教學を遠くし、修禪に専力した。19 歳の時には時調文學の大家である孤山尹善道 (1587-1671) と縁を結ぶことによって、文學的な影響を受けた。その後、28 歳までの 10 年間は金剛山、智異山等の地で修行し、文學作品も數多く残し、後日には仙巖寺に入った。1684 (甲子) 年の 69 歳の時には金華山澄光寺の祖室となつて駐錫したが、4 月 12 日に西に向つて跏趺坐して入寂した。世壽 69 歳であり、法臘 57 歳であつた。彼の遺言に従つて、鳥類と禽獸に布施するために、屍身は金華山の岩上に置かれたが、不思議にも毀損されることなくそのまま残つたという。

彼の號である枕肱のように、一生にかけて手枕して眠り、修行に専念した。多

數の漢詩を作ったが、自分の遺作を生前に焼き盡くした。さかずき（杯）の大きさに關係なく、ただ一杯の酒のみを飲み、ぼろを着て、飢えた人には自分の服を脱いで與えた。慈悲深く、清貧であり、無碍なる生涯を生きた、實に肉身菩薩の化現であった。

1. 2. 禪修行

彼の修行に關する資料としては「敬呈野遺堂」がある。これによれば、

乃投身蓮社 裹足杏壇 啓玉函於金堂 空執蹄而失兔 然寶燭於石室 徒按壁而亡羊然後 十年單瓢 千里短錫 任浮萍於漢北 逐轉蓬於嶺南 衲白蓬萊萬二千之峯月 鞋青方丈八十九之寺苔 行未及百十城 臆已過二八跌 故學匏瓜於仙寺 傍梅壇之仁村 聊將窺言 上瀆几案⁴⁾

彼の求道行脚が窺える文章である。彼は出家して僧侶になってからも、儒教の杏壇を訪ねたという。しかし、眞理は知らなかった。また、禪院で面壁觀心したが、悟ることもできなかった。彼の求道修行は熾熱した。10年間、金剛山で善知識を訪ねて求道し、また、智異山の89寺院を參拜したが、『華嚴經』の善財童子のように110城まで行くことは出来なかったという。その後、28歳から仙巖寺で參禪修行した。また、彼の修行經歷に關する資料としては、「謹上翠微堂」がある。これによれば、

然弟依葆光於冠山 十三祝髮 訪晚翁於仙榻 今古聊通 然而誦詩傳三百之篇 尙未達鳶飛魚躍之費隱 讀莊生五萬之語 猶不識覺周夢蝶之栩栩 抑又衲翻驚嶺之清風 心寒不耐 笳鳴少林之涼月 骨冷難堪 況取螢火以燒山 固稱愚者 邀空花以結果 不曰狂夫⁵⁾

枕肱は翠微に自分の修行過程について説いている。翠微に自分を弟といいながら、彼の法力を讃嘆してから自身の修行について語っている。13歳に葆光に出家し、逍遙禪師の門下で修禪に専念し、祖師語録も廣く讀んだ。また、詩傳も勉強した。彼は四書五經などの儒書と中國の古典及び老莊學に至るまで幅廣く學び、博學多識であった。なお、學問的な文字のみならず、修禪にも一生懸命に勵んだ。彼は教學者たちに教學を放して修禪することを勧める。「放教參禪」によれば、

噫吁嘻 危乎殆哉 爾不見壽陵 餘子之學 行於邯鄲歟 未得國能 又失其故行矣 直匍匐而歸 今子不去教義 將忘子之古 失子之業 曷哉君乎 勉旃慎旃 以副叅詳禪旨之言 則庶幾乎全矣

又從歌曰

大鵬高飛兮 一翮九萬

一翮九萬兮 二虫笑之

(32)

朝鮮・枕肱懸辯の念佛觀について（韓）

二虫笑之兮 惡可奈何
雖有韜天之大網 安所張之⁶⁾

『莊子』の故事成語を隱喩的に引用しながら、間接的に教學者たちを警戒している。すなわち、自分の分數を守ることが大事であり、いたずらに他人のまねをすれば、自分自身の正體性まで忘れるといている。教學を妨げ、修禪に戻って禪旨を參究することを勧めている。そのあと、歌辭形式の偈頌で結んでいる。彼はとても積極的な禪修行者であることがわかる。

すると、彼の公案は何だったのであろうか。この點については、「呈覺等師勸參禪」の記述が參考になる。

笑矣吾行不丈夫 嗟乎未了趙州無 勸君奮起男兒氣 擊碎玄關落太虛⁷⁾

覺等に參禪修行を勧誘しながら、詩を作ったものである。彼は數年間、無字公案をもって修行したが、悟ることはできなかった。しかし、覺等に無字公案を勧誘しながら、大丈夫の氣勢として、この關門を透過することを勧めている。このことから、彼が無字公案を參究したことがわかる。また、彼の「參禪」という禪詩によれば、

參禪不在多語
只是當人着意看
看去看來忘晝夜
十方坐斷獨閑閑⁸⁾

ここで、彼は參禪について簡単に整理している。參禪とは文字と言葉を必要としない、つまり、不立文字である。文字と言葉では解決できない境地である。ひたすら思いを集中し、話頭のみを參究することを勧めている。

以上を要約すれば、彼の禪修行は次の四點に纏められよう。一つには、放教參禪であり、捨教入禪である。二つには、公案は無字話頭と庭前柏樹子話を參究した。三つには、看話禪が中心であったが、默照的方法である牛頭禪も勧誘した。四つには、參禪のみならず教學と念佛など、三門の修行方法も提示した。

2. 枕肱懸辯の念佛觀

2.1. 稱名念佛の實踐修行

枕肱は參禪修行に熱心であったが、稱名念佛も持續した。その點は、特に彼の行狀と詩で確認される。彼が實踐した念佛修行の行蹟に関する資料としては、「枕肱大師行狀」がある。

母終念佛後有哭 對人念佛外無勸 故念佛終行于世 而無論貴賤 不分老少 而勸之如一 至逢娼妓 亦勸念佛 或遭角鬣 附耳念佛 此佛心之所以何物不濟⁹⁾

母の臨終を迎えたさいに、彼は一切泣かなかった。ただ、「南無阿彌陀佛」のみを稱した。臨終行儀は亡者の極樂往生と阿彌陀佛の來迎接引において重要な淨土儀式である。また、彼は普段、稱名念佛をした。人間のみならず、畜生にいたるまで畜生の耳に口を附けて念佛を聞かせるために努力した。甚だしくは市場の妓生と居酒屋及び市場の人々にも念佛を勧めた。彼は日常生活でも稱名念佛の修行を實踐しており、淨土行者的な姿がみられる。

夫大師性溫 謹貌如涉川 聲若出金石 遊心於阿彌之玄 飲覺于般若之源 一衲平生 而人供衣則遇寒者 輒解之 多忘朝夕 而衆饋食則爬鼎者 必喫之 卮酒不辭 而一酌後不舉 雖饋一巨瓠 亦不讓不醉 試酌白泔 而亦倒飲 誤進赤醎而亦無恙 是爲色相而無相乎¹⁰⁾

ここでは、彼の平素の性品と修行及び菩薩行について記している。彼の性品はいつも静かであり、溫和であったが、説法するときには聲が金石のようにりんりんと響いた。そして、いつも南無阿彌陀佛の稱名念佛を持続し、參禪して般若の悟りを成就した。従って、彼の實踐信仰は阿彌陀佛の淨土念佛信仰であり、實踐修行は參禪であるので、禪淨雙修の修行者であったと思われる。

2.2. 念佛觀

彼の念佛に關する七言絶句の詩がある。「念佛」によれば、次のようである。

心觀落日如懸鼓
口誦阿彌陀佛名
若能心口常相應
卽得西方極樂生¹¹⁾

ここでは、心と口が一つになる念佛法が示されている。すなわち、心では觀念念佛し、口では稱名念佛をすることが勧められる。ところで、心の觀法と口の稱名が互いに相應し、ただ阿彌陀佛のみを稱し念ずれば、卽得往生することができるという。彼は『觀無量壽經』16 觀法中の第1 觀法である日想觀¹²⁾ について述べている。従って、彼は稱名念佛のみならず、心口一如の觀念念佛も兼修したと考えられる。

また、彼は朝鮮時代の文學ジャンルの一つである歌辭文學に關する作品も残しており、研究が進められている。特に、彼は17世紀の歌辭作家の中で、僧侶としては唯一の作家である。彼の歌辭は「歸山曲」、「太平曲」、「青鶴洞歌」、「往生歌」である。この中で、彼の淨土念佛觀が示されているのは「往生歌」である。

(34)

朝鮮・枕肱懸辯の念佛觀について（韓）

これによれば、

阿彌陀佛 阿彌陀佛ᄃ야 一心이오
 不亂이면 阿彌陀佛이 卽現目前ᄃ니
 臨終애 阿彌陀佛 阿彌陀佛ᄃ면
 往生極樂ᄃ리라¹³⁾

この「往生歌」は詩歌形式の一つである歌辭形式の念佛曲調である。即ち、阿彌陀佛、阿彌陀佛と念佛すれば、一心になり、不亂の境地に入ったとき、念佛者の目の前に阿彌陀佛が示現することができる。もし、臨終を迎えて念佛すれば、即得往生できるという。これは二つに分析することができる。一つには、一心不亂によって阿彌陀佛を親見し、見佛三昧に入ることであり、二つには、臨終念佛によって來迎接引することができるということである。この「往生歌」は『阿彌陀經』の淨土思想が中心である。これによれば、

舍利弗。若有善男子善女人。聞說阿彌陀佛。執持名號。若一日。若二日。若三日。若四日。若五日。若六日。若七日。一心不亂。其人臨命終時。阿彌陀佛與諸聖衆。現在其前。是人終時心不顛倒。卽得往生 阿彌陀佛極樂國土¹⁴⁾

『阿彌陀經』によれば、まず阿彌陀佛に關する說法を聞いてから、その名號を一日乃至七日間に一心不亂に執持すれば、臨終の時に阿彌陀佛より來迎接引されると説いている。従って、枕肱は『阿彌陀經』の一心不亂と來迎接引の念佛思想に基づいて「往生歌」を作ったと思われる。彼は母の臨終時にも、まず稱名念佛を稱した。彼が、稱名念佛と臨終念佛を重要視する念佛觀をもっていたことがわかる。

なお、彼の念佛觀の中には極樂往生に対する發願がある。これは「勸善文」、「祝願文」、「重勅記」などに述べられている。「彌陀殿重勅」によれば、

碩德山人名悟師 經營此殿□高崑
 火龍始役渠渠壯 赤虺終功彩彩輝
 簷接大樓風引戶 軒臨方沼月籠苔
 重脩勝趣誰能管 日號彌陀含笑哈¹⁵⁾

この詩は彌陀殿の重勅のあとに詠じた七言絶句である。この詩には、彌陀殿の重勅發願者と年度及び莊嚴まで詳しく述べられている。重勅主は悟師であり、火龍丙辰年（1676）に始まり、明くる年である赤虺丁巳年（1677）に完成した。蓮池の上に高く聳えている殿閣の大きさと莊嚴さを表現している。この彌陀殿の美しさを感想するものは、ただ阿彌陀佛のみである。月影さやかな夜の池上に高く

聳えている彌陀殿の中で微笑みを浮かべる姿が想像される阿彌陀佛の贊嘆詩である。

以上のことから、枕宏は西方淨土極樂世界である他方淨土を認め、深く信じたと考えられる。朝鮮時代のほとんどの禪師たちは、自性彌陀唯心淨土説を主張した。しかし、彼は唯心淨土については一言も言わず、むしろ指方立相的な他方淨土を強調している。

3. むすびに

以上、枕肱懸辯の生涯と念佛觀について考察してみた。彼は17世紀頃、全羅南道順天の仙巖寺を中心に修行しながら、数多い漢詩と歌辭文學を残した大善知識である。彼は佛教教學のみならず、儒教と道教、老莊學まで幅広く涉獵した。彼は教學を捨てて修禪に入り、各種の祖師語録を閲覽した。『枕肱集』には、彼が著した113篇の漢詩と27篇の文、頌及び4篇の歌辭が伝えられている。

本研究では、彼の生涯と修行方法論について考察した。また、彼の修行は看話禪であり、信仰は淨土信仰である。彼は「放教參禪」という詩を作って捨教入禪の道を選んだ。參禪には言語と文字は要らない。ただ、公案のみに集中することを強調している。なお、話頭參究は無字話頭と庭前柏樹子話が中心であり、默照的な牛頭禪も勧めている。

ところが、彼の信仰生活は淨土念佛行者である。念佛とは心で日想觀し、口で稱名念佛するが、心と口が一つになることを述べている。母の臨終時には唯だ「南無阿彌陀佛」のみを稱するようにした。彼は積極的な稱名念佛者として妓生、居酒屋及び市場の人々にも念佛することを勧誘し、畜生の耳にも口を附けて念佛を聞かせるために努力した。また、各種の勸善文などにも亡者の極樂往生を發願している。彼はさかずき（杯）の大きさとは関係なく、一杯の酒のみを飲んだ。ぼろを着て、飢えた人に自分の服を脱いで與えたり、死後の肉身も畜生に布施するように遺言を残した。慈悲深く、清貧であり、無碍なる生涯を生きた大文學家と禪行者であり、なおかつ念佛行者である。

1) 懸辯『枕肱集』上、下卷（韓佛全8, 345-371）。

2) 懸辯『枕肱集』卷下「枕肱大師行狀」（韓佛全8, 368中）。

3) 李能和編『朝鮮佛教通史』卷上（新文館, 1918）, p. 501 逍遙禪師碑（李景奭撰）には「得其禪宗者 曰枕肱懸辯 傳其教宗者 曰海運敬悅」と記されているが、現存の碑文には見られない。

(36) 朝鮮・枕肱懸辯の念佛觀について（韓）

- 4) 懸辯『枕肱集』卷下「敬呈野遺堂」（韓佛全 8, 355 下）.
- 5) 懸辯『枕肱集』卷下「謹上翠微堂」（韓佛全 8, 353 下）.
- 6) 懸辯『枕肱集』卷下「放教參禪」（韓佛全 8, 368 上）.
- 7) 懸辯『枕肱集』卷上「呈覺等師勸叅禪」（韓佛全 8, 348 下）.
- 8) 懸辯『枕肱集』卷上「參禪」（韓佛全 8, 348 下）.
- 9) 懸辯『枕肱集』卷下「枕肱大師行狀」（韓佛全 8, 368 下）.
- 10) 懸辯『枕肱集』卷下「枕肱大師行狀」（韓佛全 8, 368 下）.
- 11) 懸辯『枕肱集』卷上「念佛」（韓佛全 8, 348 下）.
- 12) 『觀無量壽經』（大正藏 12, 341 下）「汝及衆生。應當專心。繫念一處。想於西方。云何作想。凡作想者。一切衆生自非生盲。有目之徒皆見日沒。當起想念。正坐西向諦觀於日。令心堅住。專想不移。見日欲沒狀如懸鼓。既見日已。閉目開目皆令明了。是爲日想。名曰初觀。」
- 13) 懸辯『枕肱集』卷下「往生歌」（韓佛全 8, 371 上）.
- 14) 『阿彌陀經』（大正藏 12, 347 中）.
- 15) 懸辯『枕肱集』卷上「彌陀殿重勸」（韓佛全 8, 351 上）.

〈參考文獻〉

『觀無量壽經』（大正藏 12）

『阿彌陀經』（大正藏 12）

懸辯『枕肱集』卷上下（韓佛全 8）

李能和編『朝鮮佛教通史』卷上（新文館，1918）

〈キーワード〉 朝鮮，枕肱懸辯，念佛觀，『枕肱集』，歌辭文學，稱名念佛，念佛
(東國大學校教授，文博)